

## 特別企画・シンポジウム「ポストコロナの舞踊と舞踊学」

## 発表要旨集

## スペイン風邪とラバン

齋藤 尚大（横浜カメラリアホスピタル）

## ・発表要旨

コロナ禍以前のパンデミックである、1918 年から 1920 年にかけて全世界的に流行したスペイン風邪は、舞踊家にどのような影響を与えたのか？本発表では、スペイン風邪に罹患した当事者であるルドルフ・フォン・ラバンを取り上げ、スペイン風邪罹患時の手紙より、罹患が精神状態をどのように変化させ、延いては舞踊に関する思考にどのような影響を与えたかを検討する。ラバンは 1910 年代に抑うつ状態（本人の言葉では「メランコリー」）を繰り返したが、スペイン風邪罹患もその一因となり、身体的・精神的に否定的影響を与え、回復のためサナトリウムでの長期の療養を余儀なくされた。しかし、精神科医のゲーミによれば、うつ病は現実性や共感性をもたらす肯定的効果もあるという。これを踏まえ、罹患時から回復期に母親や姉に宛てた手紙を読み解くと、抑うつ状態は、現実性を強め、理解を明確にし、そして舞踊に関する思考を深化させたのではないかと考えられる。すなわち、舞踊学校で指導する一方で、フリーメイソンである東方聖堂騎士団の指導者でもあったラバンは、感染に伴う抑うつ状態において、第一次世界大戦によりもたらされたオーストリア＝ハンガリー帝国の崩壊を受け、フリーメイソンなど秘密結社の持つ訓練方法を援用した「人間性 (Menschlichkeit)」の形成を舞踊の主要な命題と明確化した。その後、1920 年に出版された著作『舞踊家の世界』において、この人間性の探求に基づく舞踊家像が披瀝されたと考えられる。カールソンはこれを「内的状態の外部への表出の自由」である「積極的自由」と捉え、1920 年代におけるラバンの舞踊活動が展開する「身体化された保守主義 (embodied conservatism)」の出発点としている。ラバンの例からわかることは、パンデミック下で実際の舞踊活動は休止を余儀なくされたものの、それまでの思考内容が深化し、明確化されたことである。この例がコロナ禍以後の舞踊研究に示唆するところは、パンデミックの経験を如何に深化できるかということであると思われる。以上を踏まえ、最後に、スペイン風邪とコロナ禍という二つのパンデミックをつなぐ視点をいくつか検討したい。

## ・自己紹介

齋藤尚大（さいとうたかひろ）

所 属 横浜カメラリアホスピタル

専門分野・研究内容 近代を中心とした舞踊史

論 文 「変容的抽象とラディカルな感情移入 - ルドルフ・フォン・ラバンに対する病跡学的アプローチ」(『舞踊学』第 42 号、p45-55)

## これはコロナのせいなのか？－舞踊教育との関連

寺山 由美（筑波大学）

### ・発表要旨

ポストコロナと舞踊を考えるにあたり、私からは舞踊教育の立場から話題を提供したい。

コロナ禍の影響で、これまで当たり前活動できていたことが次々と中止になり、様々な人たちが活動の機会を奪われたことは周知の事実である。そのような機会を失った人たちの後遺症とも思える変化について、いろいろな所で話題になっている。

しかしながら、特に幼児教育から高等教育に至るまでの学校機関に在籍している若い人たちだけを見ると、その変化はコロナだけの影響なのだろうか？と疑問に思うことも多い。ダンスは身体表現であるが、そもそも時代とともに私たちの身体と表現が変化しているのではないだろうか。

そもそも「舞踊教育」を考える時、「ダンスを教え・教えられる場所」は様々な存在する。例えば、公教育として行う「体育」の中でのダンスもあれば、民間のダンススクールやお稽古場として展開されているダンスもある。さらに教えられる人の年齢は、幼児から高齢者に至るまで様々な場合がある。加えて特別な支援が必要な人、不登校の人など、対象者の状況も多岐にわたる。そして何よりダンスの種類も様々な存在する。舞踊教育の研究は、「指導者が誰に何を教えるのか」という命題が背景にあると考えられる。まずはこの点を整理したい。

その上で学校機関における、特に教科としての「体育」で展開されるダンス学習に論点を移し、「身体を教育する」という観点からダンスを捉える場合、学習者の身体についての捉え方を共有したい。そしてこのことは、「身体表現」を行う身体という論点に繋がり、舞踊文化や芸術舞踊の享受する身体ということに繋がると考えられる。利便性を増した現代社会において、身体表現を支えることになる身体の体験や感覚、言い換えれば身体そのものの在り方を改めて問う必要があるだろう。コロナ禍という余りにも大きな犠牲を払った今だからこそ、身体や身体表現について改めて考えられる機会を得ているのではないだろうか。

### ・自己紹介

寺山由美・筑波大学体育系准教授

専門分野は、舞踊教育学・舞踊論。筑波大学大学院修士課程体育研究科修了、目白大学人文学部助手、千葉大学教育学部助教授を経て現職。筑波大学ダンス部顧問。主に、体育における「表現運動・ダンス」領域の学習内容について研究を進めている。

寺山由美（2020）体育の学習内容としての身体観：「表現運動・ダンス」領域の学習を考えるために。体育・スポーツ哲学研究. 42(2)：49-63

寺山由美（2017）「表現運動・ダンス」領域における「身体表現」：「意図のある動き」の形成から捉え直す。体育・スポーツ哲学研究. 39 (2)：95-108

## コロナ禍を経た民俗舞踊の現在

吉田 純子（文化庁文化財第一課）

### ・発表要旨

本発表では、コロナ禍において従来とは異なる伝承・公開のあり方の模索や、一時休止を余儀なくされた民俗舞踊が、生活が平常に戻りつつある現在、どのような状況にあり、またコロナ禍という時期を経て獲得し得た何かがあったのか、そうであるなら、それは何であったのかについて報告したい。

ここで扱う民俗舞踊とは、各地域社会の住民が、みずからの手で、慣習として繰り返し伝承・公開してきた、いわゆる民俗芸能のことである。そのうち、令和 4 年 11 月 30 日、モロッコで開催された無形文化遺産保護条約の政府間委員会において、ユネスコ無形文化遺産代表一覧表に記載された「風流踊」41 件に焦点をあて、その伝承者や関係コミュニティの構成員等への聞き取り調査の結果を主な資料とする。

「風流踊」は、華やかな、人目を惹く、という「風流—ふりゅう—」の精神を体現し、衣裳や持ち物に趣向をこらして、歌や、笛・太鼓・鉦などの囃子に合わせて踊る民俗舞踊である。人々は除災や死者供養、豊作祈願、雨乞いなど、安寧な暮らしへの祈りを込め、祭礼や年中行事などの機会に、踊り演じてきた。多様な姿をみせる風流踊だが、山間地や離島等の比較的小さい規模の地域共同体によって伝承され、また、子供から高齢者まで世代を超えた地域住民の参加によって成立している場合が多い。盆踊や念仏踊などに代表される風流踊は、人が多く集まることを前提とした芸能であり、民俗舞踊のなかでも、新型コロナウイルスの流行による影響をダイレクトに受けたといえる。風流踊のなかには、疫神送りのために踊られているものもある。こういう時だからこそ踊りたいという言葉を伝承者から聞くものの、コロナ禍において、そのほとんどが休止を余儀なくされた。

これら風流踊は感染対策を講じたうえで、令和 4 年には規模を縮小しながらも多くが現地公開を再開、令和 5 年はコロナ禍以前の有り様に戻りつつある。踊ることができなかった時期に抱いたさまざまな想い、閉じ込めていた熱量を發揮せんばかりに踊る人々の姿を今年はいくつも見た。長野県阿南町新野の「新野の盆踊」の保存会長は、「新野の夏といえば盆踊。やめるとこんなに殺風景になるのかと思った。盆踊をやるのは大変。でもそれは苦勞じゃない。やらない苦勞は精神的に辛い。供養や送りができず、この二年間に亡くなった方は本当に気の毒だったと思っている。」と語る。コロナ禍は、自らの民俗舞踊の意味や地域社会における働き、演じることの素晴らしさを今一度見直す機会となったのではないか。民俗芸能は本来、観客のために演じるものではなく、演じる目的や必要は、関係コミュニティの中にある。そのような民俗舞踊のしなやかさ、したたかとも言える強さを、コロナ禍を経た現在、再認識したところである。

### ・自己紹介

吉田純子 主任文化財調査官・文化庁文化財第一課芸能部門

埼玉県生まれ。成城大学大学院文学研究科日本常民文化専攻、博士後期課程単位取得退学。専門は日本芸能史・民俗芸能論。中野区立歴史民俗資料館専門研究員を経て、1999 年より文化庁文化財部で文化財調査官（芸能担当）として文化財保護行政に携わる。2007 年から 2019 年まで実践女子大学非常勤講師。共同編著に『日本の民俗芸能調査報告書集成』（海路書院）など。

## 舞踊芸術におけるパラダイムシフト

唐津 絵理（愛知県芸術劇場）

### ・発表要旨

コロナ禍による行動制限において劇場が受けた影響は果てしなく大きい。しかし公演中止等による膨大な被害はあるものの、この宙づりの時間にこそ、これまでの劇場に纏わる様々な課題への見直しが行われ、それによるプラス面も十分にあったのではないかと考えている。それは多忙を極める劇場界限にて思考停止になっていた既存のシステムや制作手法に対するパラダイムシフトになったのではないだろうか。

例えば、密に集まることができないという状況の中でも、時間はこれまでより十分に確保でき、オンライン上でも議論の時間をもつことができる。ステイホームの最中にはいつ発表できるかわからない状況の中で、公演日という締切に追われない十分な思考活動が可能となる。また、プロセスを重視すること、コロナ禍で物理的にも風通しのよい空間を作るとは、これまでの閉鎖的な創作空間を開くことにもなり、創作過程でこれまで表面化してこなかったハラスメントなどの業界の問題を炙り出すことにもなった。

もっとも大きな変化は、ライブが前提であったパフォーマンスアーツの創作過程や上演方法として、オンラインを活用する新たな手法が取り入れられたことである。これまでの時間と空間を共にするという瞬間芸術であるパフォーマンスアーツの既存の考え方を反転する中で、新しいキュレーションの在り方を追求せざるを得なくなった。

つまり、集まることのできなくなったコミュニティを体験すること、この不条理の前に立たされることによって、劇場は単なる場所や空間ではなく、活動する流動体として意識させられることになったのだ。実際、コロナ禍には、これらの思考プロセスを経て、予定していた事業内容を解体して、新たな形で再構成していった。そこで、愛知県芸術劇場および、コロナ禍で創設したダンスハウス Dance Base Yokohama の官民 2 拠点で行ったこの 3 年間の具体的な事業の変化と現状を振り返ることで、ポストコロナにおける劇場舞踊の課題と今後の展望について考えてみたい。

### ・自己紹介

唐津絵理 愛知県芸術劇場エグゼクティブプロデューサー、Dance Base Yokohama (DaBY) アーティスティックディレクター、あいちトリエンナーレ 2010-16 年パフォーマンスアーツ部門キュレーター。お茶の水女子大学（舞踊）、熊本大学（地域政策）等で非常勤講師。お茶の水女子大学文教育学部舞踊教育学科卒業、同大学院人文科学研究科修了。舞踊論（ポストモダンダンス、コンテンポラリーダンス）、ダンス研究、アートマネジメント、劇場・文化政策論。「身体の知性」編・著（愛知県文化情報センター）、「20 世紀舞踊の作家と作品世界」担当・共著（遊戯社）。令和 4 年度芸術選奨文部科学大臣賞受賞、メセナアワード 2023 にてメセナ大賞受賞。